

「私と箸」というテーマのエッセイを募集し始めたのが、二〇一四年のことでした。正直、どれほどの人がこのエッセイ賞に興味を示してくれるのか、また、箸と自らの人生に関わる話がどれほどあるのか見通しは全くありませんでした。

当然ながら初回の応募数は少なく、やはりダメかと思いつながら応募作を読むと、予想は裏切られました。子供の頃の箸を巡る思い出が鮮やかに描かれているではありませんか。箸が家族や周囲の人たちとのまさに架け橋となつて、その人の人生に様々な光や影を残していることが分かつてきました。

回を追うごとにその思いは深まり、五回目となる二〇一九年度ではなんと五〇〇通を超える応募をいただくようになりました。

その内容も審査員たちが驚くほど多彩で、こんなことがあるのかと不思議に思う話もありました。今回、さらにうれしかったのは高校生たちが秀作を寄せてくれたことでした。

五回分の受賞作を収めたこのエッセイ集には、箸を巡る人間のドラマが集約されています。ぜひ、ご一読いただくと共に、ご自身も箸に思いを寄せ、日常の何気ない生活から「美しい真珠」を拾い上げていただきたいと思います。

エッセイ賞『私と箸』選考委員長 吉村 克己

目次

第五回 二〇一九年度	大賞	鷺掴み	植田 旭彦
	優秀賞	割り箸のエール	小松崎 潤
	優秀賞	箸と家族	大恵 やすよ
	優秀賞	小さな噛み跡	稲田 あかね
	優秀賞	ゴムとお箸の一組セット	藤野 高明
	特別賞	箸チャレンジ	末永 芽
	奨励賞	割り箸と力	(中・高校生の部) 國崎 萌子
	奨励賞	箸で見る人柄	(中・高校生の部) 村尾 未羽子

5 ページ

第四回 二〇一八年度	大賞	魔法の夫婦箸	植田 旭彦
	優秀賞	温もりの架け橋	片山 ひとみ
	優秀賞	彼が一番輝いたとき	高田 外亀雄

21 ページ

特別賞	箸の前世	幾原 正智
特別賞	お守り	大西 賢
特別賞	想い出の懸(か)け箸	飛塚 優
特別賞	父の箸	菅原 真知子

第三回 二〇一七年度	大賞	元気をくれた箸	感王寺 美智子
	優秀賞	今日から	奥村 由布子
	優秀賞	憧憬	高尾 光秀
	優秀賞	一膳の竹の箸から	築城 弘美
	特別賞	怒られなかった箸の練習	森山 ひかる
	特別賞	お箸が教えてくれたこと	(中・高校生の部) 下村 花連
	審査員特別賞	たん生目プレゼント	(小学生の部) 上之段 亜玖吏
	審査員特別賞	つながっているおはし	坊垣 妙泉
	審査員特別賞	大切なもちかた	坊垣 心都

38 ページ

第二回 二〇一六年度・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 54ページ

- 大賞 有る審職人さんとの出会い 玉井 貴夫
優秀賞 無名兵士の審 武富 慈海
優秀賞 母の手元の思い出 高田 勝
優秀賞 八角審 本間 由美
優秀賞 美しい審使いは父の思い出 太田 美樹子
優秀賞 私と審 山口 尚人
審査員特別賞 私と審 (中・高校生の部) 畑島 杏果利

第一回 二〇一四年度・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 68ページ

- 大賞 あの頃、みんなが伝えたこと 奥岡 伸子
優秀賞 審と共に旅立った両親 小林 千榮子
優秀賞 えんむすび 高橋 有希子
優秀賞 審を使える誇り 阿部 松代
審査員特別賞 審で世界は仲良くなれる (一般の部) 浅井 宏純
審査員特別賞 私と審 (中・高校生の部) 末永 寿穂
審査員特別賞 文化の架けはし(審) (小学生の部) 大城 蓮

第五回エッセイ賞 大賞

鷲掴み

植田 旭彦

『日本のしきたり・作法』についてテレビで放映していた。審の使い方について多くの芸能人が悪戦苦闘していた。画面に見入っているうちに、遠い昔の苦い思い出が蘇ってきた。小学四年生のときだ。
「おい、○○ちゃん、鷲掴みしとるぞ」と悪ガキのタカオが私を指さし、あざけて笑った。級友の冷たい視線に耐えられずに下を向いた。若い女の担任も助けてくれず笑いこけていた。

翌日から仮病で四日休んだ。が、バシて母に事の顛末を話した。母は、くやしさを堪えているのか唇をかみ無言で、うつむいていた。

私は幼少の頃、脊髄性小児マヒを患い手足の自由を奪われた。医者から匙を投げられたが祖父の松葉杖による歩行訓練で奇跡的に歩けるまでになった。だが、喜びは束の間だった。

小学校の入学が許されずにいた。終戦から十年、昭和三十年頃で障がい児の教育を受ける権利は剥奪されていた。翌年四月に周囲の支援により一年遅れで入学が許可された。

四肢のうちマヒを免れたのは左手だけだ。字やソロバンその他左手使いだった。なぜか、審使いは右手だっ

た。不自由ゆえに驚掴みだった。タカオからの罵倒も無理からぬことだ。日本の文化・習慣として箸使いは、きびしく躰けられていた。それゆえに、タカオには驚掴みは野蠻にみえたのだろう。

母はじめ、誰からも驚掴みを注意されずにいた。右手がマヒゆえの黙認だったと思う。あの日以来、タカオの言い種が頭にこびりついていた。時は過ぎ西洋文化が日本に浸透するにつれて、野球選手や各界の著名人が左手使いとなり認知される時勢となった。

そこで私は奮起して左手で箸を持つ練習をした。箸がうまく操ることができたのは三十歳の頃だった。還暦のとき小学校の同窓会が開かれた。半世紀ぶりの友の顔が集まった。

タカオがやってきた。今は土建会社の社長という。金縁のメガネをかけ突き出た腹をかかえ豪快に笑う。

「俺さ、お前に謝りたいんだ。覚えてるか給食のとき箸の持ち方で言っただけ悪かった。許してくれ。俺よ、事故で右手がきかなくなっただけ、左手で箸の使い方を練習した。辛かった。お前の苦しみが、よくわかったよ」
見ると、タカオの右手は背広の下でゆれていた。

「俺、忘れたよ……」

私の声はふるえうわずわっていた。タカオは怯えながら左手を差し出してきた。互いに武骨な三本の手のしわすじに温い水が流れていた。

第五回エッセイ賞 優秀賞

割り箸のエール

小松崎 潤

「割り箸なんてもったいない」

職場の割り箸を注文したとき、隣で妻がぼやいた。僕は苦笑いしながら電話を切った。懐かしい記憶がよみがえり、少し胸が熱くなった。

あれは僕が学生の頃だ。毎日利用する食堂に割り箸があった。環境社会学科の僕としては、それらを使うことには抵抗があった。むしろ自分はマイ箸を普及させる側の人間だと思っていた。しかし小さく書かれた文字に目を奪われた。

「この割り箸は間伐材を使用しています。間伐は木を守り、森を守ります」

確かに間伐作業をしなければ森林は放置されたままの荒れた森となり、引いては自然災害を起こしやすくなる。だとすればこの箸はどんどん使うべきだろう。だけどコストは。人件費は。そんなことを考えるとやはり手が出なかつた。だけど僕は無性にこの割り箸の向こう側が見たくなつた。

そんな好奇心から大学一年の夏休み、埼玉にある製造元を訪ねた。事前に問い合わせるとボランティアも募集しているとのこと。簡単な袋詰めくらいだろうと軽い気持ちで引き受けた。

しかしいざ現場に行くと僕は重たい現実を突きつけられた。その製造行程。木材の皮むき、製材、煮沸、スライス、プレス、乾燥、選別、面取り、磨き、袋詰め。どれも手作業だった。気の遠くなるような行程に、厳格な選別体制ゆえロス率はなんと四〇パーセントというから開いた口が塞がらない。近年は中国の安い材木の流入により、経営状況もよくないという。

しかしここは障害を持つ方が沢山働いていた。目を凝らしながら一つ一つ検品したり、手の震えを抑えながら袋詰めをしている人もいた。そんな姿に僕は「割り箸なんてもったいない」とはとも言えなかった。むしろ人も自然も守りながらできたこの箸を大事にしたいと思った。間伐は木を育て、森を守る。そしてこの割り箸は人の心を育て、雇用を守る。割り箸の袋に記された「森、人、みんなイキイキ」の文字。僕も突き動かされるように、その後福祉の道に進み直した。

現在、知的障害者の作業所で働く僕は昼になると皆で弁当を食べる。パンツと響く割り箸の音がこの箸に携わるものへのエールみたいに聞こえる。

第五回エッセイ賞 優秀賞

箸と家族

大恵 やすよ

「お姉ちゃんの箸変えたん？」

台所にいる母に声をかける。この日、朝から母は何だかそわそわしていた。

我が家では、カップに箸を入れて食事の時にそれをテーブルの真ん中に置き、各自が自分の箸をとって食事をする。両親と姉、兄、そして私の五大家族だが、この日はなぜか新しくなった姉とペアの箸が一膳多く入っていた。

食事の用意を手伝っていると、そこへ姉が帰ってきた。姉の横には、男性が立っている。姉が初めて彼氏を家に連れてきたのだ。

お揃いの箸を使う姉と彼を見て、まるで新婚夫婦のようだと思っただけ。しばらくすると、二人は本当の夫婦となり、子供が三人生まれた。そして小さな箸が三膳、箸立てに仲間入りした。

そんな頃だった。私に初めて彼氏ができたのだ。毎日が楽しくて仕方がなかった。毎晩家で食事をしていて私が、彼との外食が増え家で食事をあまりとらなくなった。

ある日、久しぶりに家で食事をとろうとした私は、箸が変わっているのに気が付いた。

「お母さん、お箸変えてくれたん？ありがとうございます。」

「そのお箸ステキやろ？ほんまはペアやねん。だから今度彼を連れておいで」
彼氏ができたことが母にばれていた。まだ内緒にしていたので恥ずかしかったが、その日新しくなった箸を使いながら、いつ彼を家に呼ぼうか私は考えた。

そして付き合いだしてまだ一か月もたないうちに、彼を家に呼ぶことにした。私の箸と色違いの箸を使う彼を見て、「将来この人と結婚できればいいな」と思った。その願いは三年後、見事に叶い、二児の母となった私。

実家の箸立ては、もうすし詰め状態となっている。私は母に「もう一つカップを増やす？」と提案したが、「家族は一つのように、カップも一つでいいのよ」と、母は笑って言った。

母が用意してくれたペアの箸は、我が家に家族と笑顔と幸福をもたらしてくれた。そしてこれからも、それらはもつと増えていくだろう。「幸せの数だけ箸があるんよ」と、母と箸が言っている気がした。

小さな噛み跡

稲田 あかね

ごつごつとした感触。台所で洗い物をしていると、泡だらけの箸に違和感を感じた。

泡を洗い流すと、娘の小さな箸の先に小さな歯型の噛み跡。

「またか。」と胸がキュッと痛んだ。

八ヶ月の頃から保育園に通っていたので、五歳になる娘はすっかり保育園になじんでいた……と思っていた。少し前から保育園では箸の使い方を習っていて、お弁当にも箸を付けるようお手紙が出されていた。近所に住む私の母に箸の使い方を教わって、娘は上手に箸を使うことができた。ただし、左手で。

保育園に箸を持って行き始めたある日、迎えに行った私を先生が呼び止めた。

「お昼ごはんの時間、お友達に、左手で箸を持つちゃいけないと言われて泣いてしまっただけ。」

今の時代に左利きぐらいで、と軽く考えていたし直す気もなかった。左利きに関しては全く気にも留めていなかった。が、やはり集団生活では皆と違ふところが叩かれてしまうのか。家に帰っても娘がその話をしないので、私も黙って様子を見ることにした。

翌日、持ち帰った娘の箸は、先がギザギザに噛まれて歯型が付いていた。友達に責められたのを箸を噛んで耐えたのだろう。娘の気持ちを考えると涙が出そうになった。私は娘に話した……左利きだって、人と違ってたって構わないこと。

——いじめって、こんな風に始まるのかもしれない。

胸がざわついて鼓動が速くなった。

ハラハラしながら数日を過ごしていたある日、迎えに行くと先生が飛び出してきて教えてくれた。

「今日のお昼、また『左手で箸を持つやいけないんだ!』と誰かが言い始めたら、翔ちゃんがね、転園してきたばかりで大人しかった翔ちゃんが『別に悪いことじゃないじゃん!』と急に大声で。それでね、その後がね『うちのパパだってお化粧してスカート履いて仕事に行くけど、悪いことじゃないし!』って。先生たち大笑いでね……。」

思いがけない話の流れにあっけに取られてしまったが、しばらくして急におかしくなって笑ってしまった。転園したばかりの、父子家庭の翔ちゃん。大人よりすごいな。お父さんの事、ちゃんとわかっている。いい家族。今度会ったら、翔ちゃんとお父さんにお礼を言わないと。

それ以来、娘の箸の先に歯型が付く事はなくなった。娘ももう高校生。「左利きって天才が多いんだって。」なんて言えるぐらい強くなった。

きれいに塗られた箸の先を見ると、たまにふと、あの小さい歯型を思い出す。

第五回エッセイ賞 優秀賞

ゴムとお箸の一組セット

藤野 高明

私は目が見えません。目が見えないだけだったら、お箸を使って食事をするのにそんなに苦労はありません。しかし、私には左右の手指ありません。これは大変な不自由と不便を伴うことです。ただ両手共、肘から下がかなり残ったのは幸いなことでした。

この様な二重障害を受けたのは、戦争が残した不発爆弾の爆発でした。小学二年生でした。もちろん食べる事だけで無く急変した自分の状態をなかなか理解できず、悲しかったり、悔しかったり苛立ったりしてよく泣きました。親たちは本人以上に辛い思いをしただろうと思います。

それでも人は次第に現状を受け入れ、新たな日常を取り戻すことが出来ると今ではそう思えます。

食事はケガをしてから、およそ二、三年位だったでしょうが、あまりハッキリとは覚えていませんが、親たちに食べさせてもらっていました。しかし、成長と共にその事がとても嫌で苦痛にさえ感じる様になりました。ある時母に言ってお握りを作ってもらい箸を使わずに食べることを覚えました。一人で食べられる喜びが戻ってきました。そのうちに父が右手にスッポリ入る布で作った袋に、フォークを取りつけてくれました。袋がはずれたりしないように紐でくくってもらうと、右手を使って一人で食事ができるようになりました。

そのうちフォークに変えて少し太めのお箸を二本並べて、動かぬ様に縫いつけそれで食べる事ができるようになりました。十四、五才の頃だったと思います。

父親の苦心の発想と工夫が私の食生活を、大きく改善してくれました。

でも今はもう、こうした袋は使わずもつとスマートに自然にお箸を使って食事ができる様になりました。幅一センチ足らずのゴムで輪っかを作ってもらい、それを二重にして右手の肘の少し下に巻きつけ、そこに二本の箸を差し込んで食べるのです。

大抵の箸は大丈夫ですが、細目でツルツルした箸や両端が細くて中程が太くなっている箸は苦手です。一番使いやすいのは、やや太めで安定がよく滑りにくい箸です。

時々食事を共にする仲の良い女性の友達は外食する時にはいつも私用のゴムとお箸を一組セットにして自分の鞆に入れて来てくれます。大変嬉しいことです。

第五回エッセイ賞 特別賞（中・高校生の部）

箸チャレンジ

末永 芽

12時間のフライトを終え、ダラス空港に到着した私は、これから始まる留学生活に胸の高まりが止まらなかった。

しかし、その高まりは、ものの数分で玉碎されることになる。

空港に迎えに来てくれたホストファミリーと、笑顔で挨拶を交わしたものの、その後の会話は早すぎて聞き取れず何を言っているのかわからない状態に陥ったのだ。多少の英語力はあるつもりだった。1年間やっていたのか、不安から笑みがなくなっていくのがわかった。

車でホストファミリー宅に向かう車中、話すのが怖くて寝たふりをしたが、ホスト宅に到着し部屋にもこるわけにもいかず、早々に土産で持参した「箸」を出してみた。

日本と言えば「箸」、もう海外では周知されている文化かもしれないと、おそるおそる渡すと

「使ってみたい！どうやって使うのか教えて！」と、ゆっくりとした口調で言ってくれた。その言葉を聞き取れたことと、箸を喜んでくれたことで、この留学なんとなかなるかもと緊張が和らいでいった。

箸の持ち方、使い方を伝えると、ホストマザーがカラフルな豆を持ってきて

「何個取れるか競争しよう！」と提案してくれた。歓迎のために集まってくれたホストの親戚も参加し、この「箸チャレンジ」は大盛り上がり、みんなが笑って楽しい時間を過ごせた。その楽しさから、誕生日やハロウィンなどイベントのたびにこの箸チャレンジが登場することになった。

学校が始まり、少しずつアメリカの生活にも慣れていったが、課題の多さには辟易していた。そんなある日、また大量の課題を出されグツタリと帰宅すると、ホストマザーが私を見て

「今日はどんな1日だった？元気がなさそうね。またみんなで箸チャレンジする？」と言った。

「豆を掴めず大騒ぎしていたことを思い出し、クスッと笑うと

「笑顔のあなたはとても素敵。つらい時はいつでもハグするよ」と言ってくれた。

その言葉にハツとした。「つらい時はいつもそばにいるよ」と、母がよく言ってくれていた。アメリカにも私を気遣ってくれるお母さんができたのだ。さすがに課題は代わってくれないが、自分を大切に思ってくれる人がいると思えたら、大変なことでも頑張れた。

今夏帰国し、箸を使うたびにアメリカの家族を思い出す。私にとって「箸チャレンジ」は異国で笑顔になれる大事な文化になったのだ。

第五回エッセイ賞 特別賞（中・高校生の部）

割り箸と力

國崎 萌子

私はバレーボール部に所属していて、土日の練習の後には仲の良い後輩を誘ってラーメンを食べに行く。しかし私はいつも運ばれてきた食事の前で溜息をつくことになる。私はいつも割り箸をきれいに割ることができないのだ。一本の箸が裂けるように割れ、その裂けた木の一部がもう一方にくっついて、歪な形の箸が出来る。出来る。

「先輩、力み過ぎてるんじゃないですか？

馬鹿力もほどほどにしてくださいよ」

先輩は、きれいに割れた自分の箸を私の目の前に掲げて笑った。私の割った箸でも箸としての機能を果たすから良いのだと反論するが、先輩は聞いていないかのようにラーメンをすすっていた。

それから学年が一つ上がった春、チームのキャプテンが怪我で入院し、私はその代理に抜擢された。大会が近いいため苦手なサーブ練習をもっと突き詰めたかったのだが、キャプテンはチームの練習メニューを立てなければいけない。その上、ちょうどこの四月は新人部員勧誘の真っ只中で、私はキャプテンになる前から勧誘のポスターを描く担当になっていた。

「ああもう、なんで私だけがこんなに大変なの」

後輩と並んで座るラーメン屋で注文を待つ間、私はずっと苛立っていた。後輩は何も言わなかった。頼んでいたラーメンが運ばれてくる。私は来週の練習や真近に控えた大会の選手について考えながら、いつも通り箸を手にとった。

ばちん、という軽い音とともに箸は割れた。私はここでいつもと違うことに気が付いた。少しも折れたり避けたりしていないまっすぐな箸になっていたのだ。私は後輩にその箸を見せる。

なぜきれいに箸を割ることができたのか。力み過ぎだという以前の後輩の言葉が脳内を回る。割ろう割ろうと意気込んでいるから指先に余計な力がかかってしまうのかもしれない。今日はずっと部活動のことで苛立っていて、箸について何も考えずに割った。だから成功した。

「多分だけど、今のキャプテンも同じなんじゃないかなあ」

後輩はこちらに顔を向けず、ぼそりと呟いた。同じということは、私にも箸を割るように無駄な力が入っていることだろうか。後輩の横顔を見つめ、はつとした。

明日、練習メニューについてメンバーと相談してみようか。何も私が一人で力む必要はない。後輩に教えられるまで、そんなことにすら気が付かなかった。私は後輩に、麵のびちゃいますよ、と声を掛けられるまで、きれいに割れた箸を見つめていた。

第五回エッセイ賞 奨励賞（中・高校生の部）

箸で見る人柄

村尾 未羽子

アルバイトをはじめて1年。私はこの1年間でとある光景が気になりはじめた。それはお客様が食べ終わった後のトレイの上に乗っているお箸のしまい方、置き方だ。

アルバイト先ではお客様が帰った後、机に乗っているトレイをキッチンまで運びバラしをする作業がある。キッチンの人が洗いやすいように手早く食器を並べていきゴミや食べ残しはゴミ袋へ、お箸は専用のゴミ袋へ捨てる。人がたくさん入ってくるとバラしの所がすぐくたまるのでどれだけ素早くバラせるかが大事になってくる。私もアルバイトを初めた当初よりかはスピードも早くなって今ではバラしの作業がかなり好きな場所となっている。キッチンでのバラしはホールに出たお客様と接しないから安心感がある。

そんな中、今までたくさん量の量をバラしてきたのだが私は一つ気になったことがある。お箸の置き方だ。大多数の人が食べ終わった後のお箸の置き方、しまい方なんて気にする人はいないと思う。多分そんなどうでもいい事を深く考えてしまう私は変人。

お箸の置き方から勝手にその人を想像してしまうことがある。きれいにおてもとにお箸をしまう人はすごく偏見ですがこういう人は人に丁寧に対応することができる人だなと思います。もったきれいなのがおても

とに入れたお箸の先を紙をくくって折っている人もいます。遊び心か不明ですが見た目がきれいなので年配の方が食べた後なのかなと思ってしまう。1番多いのはトレーの上にそのまま乗せている人や食器の上に乗せている人です。至って普通。バラしやすいので助かります。中にはお箸の2本を1本ずつバラバラに置いてある人もよくいます。急いでいた人だったのかあたって別方向に行ったのかとても考えます。多分その人にとっては何の意味もない置き方だと思う。けれど私はとてもおおざっぱなんだと思ってしまう。(悪意はないです)

一番驚いたのはコップや湯のみの中にお箸をさしている人。これはもうその人に尊敬した。初めてそんな置き方をする人が見れたからおもしろかった。除菌的な意味でお箸を水につけていたのかなとかそんなしよもない想像しか出てこなかった。同じ職場で働いている人も驚いていたので相当だったと思う。

私は今まで人のお箸についてこれほどまでに考えた事はなかったがバラしていくうちにその人の人物像を勝手に想像することができるようになった。とてつもなく偏見。だけどその偏見がおもしろい。

第四回エッセイ賞 大賞

魔法の夫婦箸

植田 旭彦

食器棚を整理していた家内が言った。

「あなた、ほら夫婦箸よ。あの日、感動したわ。ふしぎな箸よ。でもさ、わたしが買ってない夫婦箸が、あのとき、どうして家にあっただのかしら」と、しつこく言い寄ってきた。心ならずも、苦々しい思い出話をするはめになってしまった。

私が中学生のとき、京都・奈良の修学旅行のみやげに夫婦箸を買ってきた。

「箸なんて、たんとあらあによ」

「せっかく、買ってもらったけん」

父の言葉に母は私の顔をうかがいながら、父をなだめすかした。だが、頑固一徹な明治男は冷ややかな顔をしてコップ酒をあおった。「勝手にしろよ!」と捨て台詞をはいて、私は外に飛びでた。夜空にまたたく星々がぼやけて見えた。

そして歳月が流れ、私が三十で結婚するとき、父がぶつきらぼうに言った。

「おい、夫婦箸を持っていけ」

「だって、俺がふたりのために買ったじゃ」

「仲良くな、それが一番の親孝行だべ」

そのときは腑に落ちなかったが、新居の食器棚に夫婦箸を家内に話すことなくしまつて、すっかり忘れていた。父は、箸を使うのはもつたいたいと言つて大切に保管していた、と後日、母から聞かされた。

父が大病を患い入院したのは齢七十五で私が五十路にさしかかった頃だった。食は細くなり胃ろうをすめられた。だが、父は頑なに嫌がった。体力が弱まったせいか、ついに観念し胃ろうを承諾した。手術の二日前、最後の晩餐だった。

私は懐に秘策をひっそり家内と病院にいった。ベットに座つた父の前に普通食がおかれていた。口にできなかりうに、病院の心づかいと思つた。父は箸を持つでもなく、こそげた頬をふるわせた。

私は上着のポケットから夫婦箸をとりだした。

「父さん、覚えてるかなあ、この箸だけど」

「おおつ、忘れんもんか」

父の顔に血が流れ、喉仏がふるえた。父は箸を手にし少し考え込んだが、鱈の煮付けに箸をつけ口に運んだ。食べたあと、そばにいた看護師が病室を素っ飛びでて、主治医を引つ張つてきた。

「おおつ、まさか、食つたか、箸に御株を奪われたわ。手術はやめだ」

医者坊主頭に手をやり肩をすばめた。

「先生、魔法の夫婦箸でな」

父がにたりとした。私達も亡き父の歳に近づいてきた。父が口にした箸は二十年、食器棚で眠っていた。

「夫婦箸を使いましょうか」

家内がぼつりと言つた。

温もりの架け橋

片山 ひとみ

「この生徒はユニークな持ち方をするな」

親子そば打ち体験会を開催した時だった。

招いたそば屋の白髪混じりの店主は、会食が始まると、親子のテーブルを笑顔で回っていたが、ふと、腕組みをして唸り、続けた。

「せっかく自分らで粉から打った旨いそばも、そんな箸使いじゃ、虚しい気になるなあ」

主催したのは、当時、娘が通うこの中学校のPTA会長をしていた私。なんだか自分が非難されたようで、苦しくなった。

「ほんなら、おじさん、教えてん」

男子生徒が手を挙げた。その頃、学校は荒れており、彼も細眉に制服をダブダブズボンにして腰履き、カッターシャツも出していた。

店主は、「任せとけ」とばかりに、側に寄った。彼の手を取り、動かそうとしている。

「もう、わからん。わし、成績悪いんじゃ」

傍らの母親も、「私もできんわ」と赤面した。

店主は、思いついたように、「よっしゃ」と吹き、荷物から輪ゴムを大量に出してきた。

「これをな、薬指の第一関節に巻くんじゃ」

親子五十組ほどが、背中を丸めて指に通す。

「下箸を通し、上箸だけ鉛筆持ちで動かす」

しわがれた声の店主の説明を授業より真剣に聞く子どもたち。隣席の親は、ちゃんと通しているか手伝い、互いの手元を見つめ合う。

「わぁ、動かん。箸使うの、難しいで」

「私、何十年も間違えとった。恥ずかしい」

あちこちで驚きやため息、笑いが起きる。

私が企画した目的は、親子の触れ合いを持つことだった。親と子の心の距離が空くほど、子どもがやんちゃなシグナルを出す気がしていた。せめて、手作り作業と食卓を共にすることで、接近のきっかけづくりをしたかった。

「おかんに手を握られたの何年ぶりか」

「まだまだ子どもに関わらんといけんな」

顔を赤らめ嬉しそうな男子、娘に抱きつく母親。使い方を学ぶ親子の背中が寄り添い重なり情愛が会場を

包んでゆく。その姿に、箸は大切な人との温かな架け橋を作ると知った。

「将来、彼、彼女とデートする時、恥ずかしくないように、家でもよく練習してな」

店主が、道具を積み込み手を振りながらワゴン車で去っていく。みんなもお礼を叫んだ。

「ええ勉強やったあ。そばもお箸も忘れん」

反抗期の娘が照れながら近づいてきた。最近、ろくろく口も聞かなかったのに。

「今晚お父さんにも使い方教えてあげよう」

娘の提案に涙がこみ上げ、何度も頷いた。

第四回エッセイ賞 優秀賞

彼が一番輝いたとき

高田 外亀雄

筋萎縮症の小学四年のS君の担任をした時、彼は車いすで指は動かしたが、手は少ししか上がらなかった。給食はスプーンだった。

「食事は箸だ！の考えに固まっていた僕は、

「S君、給食は箸を使おう」

と提案した。しかし、直情径行型で思いついたら直ぐ実行する僕は、彼の意向を聞かなかった。

さっそく、厚紙で一辺が一センチの立方体を作り、それを箸で挟む練習をした。まず中指で下の箸を支え、上の箸を人差し指と親指でつかむ。うまくつかんだぞ、その調子だと励ます。次に人差し指と親指により力を入れて、厚紙の箱を挟めと指示した。あっ、落ちたぞ、もっと力を入れろと、また挑戦させる。挟む力が弱いので、なかなか挟めなかった。

給食ではご飯粒一つを挟むというより箸にくつつけて、少し持ち上げ口を近づけて食べた。やったぞ、万歳と叫ぶと彼もにこっとした。その後、彼のいたずら心で、コロツケを四等分しその一切れに箸を突き刺して食べた。彼は

『ヤッター』

と声を上げた。よほど嬉しかったのだろう。

ところが、この箸の訓練と食べ方が病気の子には適切でない。訓練ではなく苦行だと批判されたのだ。確かに筋肉の病気の子にする訓練ではない。刺すなどは行儀も悪い。僕は批判されて、はっと気づいたのであった。

その後、彼は病院付設の中・高養護学校へ進学し、卒業後は放送大学で学んだ。その間、僕は彼に非常識なことをしたと、負い目を抱き、悪いことをしたと自分を責め続けた。

彼の病状は悪化し、人工呼吸器を付けて指さえ動かなくなった。それでも彼が放送大学で学び続けていると知った時、僕はなぜか謝りに行く決心がついたのである。

病室には祖母がいた。箸の件を素直に謝ると、祖母はとんでもないと否定し、逆に箸の訓練をしてもらってお礼を言うという。えっと、息を飲んだ。祖母によれば箸で挟む訓練を家でもして、家族中が箸挟みに熱中したそうである。リンゴ、メロン等を小さく切って挟み、彼はほとんど難しくしたらしい。それまで家族は、彼に新たな挑戦を避けさせ、腫れ物に触るようになっていた。祖母は

「それで箸挟みは新鮮だったのでしょうか」

と彼を見た。さらに

「Sちゃん、ガンバレ、力を出せて楽しかったね」

彼は頬をピクツとさせた。

その瞬間、彼が箸挟みに熱中したのを確信した。僕はその切っ掛けをつくったと思うと、少しだけ気が楽になったのであった。

箸の前世

幾原 正智

私が五二才の時、父が八二才で亡くなった。遺品の中に剣道二段だった父の木刀が二本あり、一本は弟が持ち帰った。

木刀振る趣味なかった私は、父を身近に感じていたくって、木刀を三分の一横に切断して、常に使う箸を作ることにした。大体、櫛の箸なんて世の中に存在するのか分からなかったが削り始めると、櫛は木へんに堅いと書くだけあって、堅いこと堅いこと、ヒーヒー言いながら数時間かけて、やけに先端がとんがった箸を作り、食事の度に、その箸を使って飯を食べていた。

二〜三年に一度は訪ねていた福島県の友人から、又遊びに来いの誘いがあり、行くと、とある山への登山を提案された。

さて出発すると、大して高い山でもないのに、人生で初めて自然の中で熊に出くわしてしまった。人生不幸な時は不幸が続くものである。前年、父を亡くし、写真の本業の仕事も少なくなり、胆石の持病が悪化して、医者からは手術を言われていた。その時に熊である。

木の棒を拾って、向かって来たら応戦しよう思ったが、山の中、木だらけのくせに、そんな時に限って、

木の棒が落ちてるわけもなく、あせっている、「あっ！」と思いつき、自分のカバンの外ポケットの中から例の箸を二本とも取り出した。友人は

「目を熊からはみぎまぎに、うしろに下がれ、下がれ！」

と、私に言ったが、私は色んな不幸が重なって、多少ヤケクソになっていたであろう。箸を右手に、小走りに熊に向かっていた。

逃げるかと思ったら、熊もこっちに走って来た。

「何やってんだ！」

という友人の叫び声を背に、私と熊はとっ組み合いになった。カバンを左手に熊に押し合せて、ガードして、右手に持った箸で十五回くらい熊の体めがけて突きまくった。

さすがに効いたのだろう。熊は急に攻撃をやめ、踵を返して小走りに逃げて行った。

友人が蒼い顔で、すまなさそうにやって来た。私はその時ある事を思った。宮本武蔵が佐々木小次郎と対決する前に、舟をこぐ櫂を削って、長い木刀を作った様に、私は父の木刀を削って箸を作り、その箸のおかげでむかってくる熊を撃退し、命拾いをしたのである。その事を友人に話すと、何の手助けもしなかったくせに大笑いした。

金銭的には、ほとんど財産を残してくれなかった父だが、箸にも棒にもかかるシャレたものを残して命を救ってくれた。思えば、生きてた時は、ずいぶんシャレた男の父であったのだ。その点だけは受け継ぎたい。

お守り

大西 賢

高校三年の夏休みに、自転車で東京から鹿児島まで行くという冒険に出た。両親はとても心配していたが、若い私はこれから出会う人たちや出会う景色にばかり思いを馳せ、半ば家出同然で旅立った。

東京の自宅を出て二週間ほどしたある日、私は岡山県で親切な人に出会った。

「うちに泊まっていきなさい」

と言ってくれたおじさんがいたのだ。私はおじさんの好意に甘えることにした。おじさんの自宅に行くと、すでに連絡を受けていたおばさんが、すきやきを作って待っていてくれた。

「キミ、自分専用の箸は持ち歩いているの？」

食事前、そう訊かれて、

「持っていません」

と答えた。なにしろ、ひどい貧乏旅行だったので、箸を使う機会がほとんどなかったのだ。ビル清掃のアルバイト代を資金にしていたのだが、予算が少なかったため、毎日パンの耳でしのいでいた。だから、箸を使う機会などほとんどなかったのだ。

事情を聞くと、おじさんは一膳の箸を、

「これを餞別代わりにあげる」

と差し出してくれた。そして、おじさんは言った。

「自転車旅行は体力を使う旅だ。パンの耳などではなく、きちんと箸を使って食事をしないとダメだ。きちんと食べてきちんと走り、そしてきちんと家に帰る。今のキミの仕事は鹿児島まで到達することではなく、元気な顔で両親の元へ帰ることなんだ」

よくしたもので、それ以降、箸を使って食事をするようになると、体力もつき、それまで押して登っていた坂も自転車で登れるようになった。旅館に泊まらずに野宿をし、その代わりにきちんと食事を摂ることで、結果的に体調が改善されたのだ。

おじさんが餞別代わりにくれた箸は、今でも使っている。

今でもあの箸を使うと、おじさんの言葉と当時の両親の心配を思い出す。

私にとってあの箸は、無事に家まで帰ることができた、お守りのような存在なのだ。

思いでの懸け箸

飛塚 優

昨年の大晦日に帰省した息子たちと大型のテーブルを移動した。いつもは妻と二人だが正月には多人数が集うからだ。移動を楽にするため引き出しを総て取り外したところ、その中のひとつに箸が整然と収納されていた。次男が何かに気づいてテーブルの上で中身を広げだした。まず折り紙の中に入った塗箸や柳箸などが数セットずつ。次には高級な割り箸や旅先で買った民芸品の箸が多種類。箸置きも材質を問わずに続々とでてきた。

「あつた！これだ。懐かしい…」

次男は小さなプラスチックの箸箱を見つけて短い箸を取り出した。箸も同じくプラスチック製である。これは彼が幼稚園児の時に、お弁当箱と対で使っていたものだ。

「うわっ、短かつ！」

と彼が笑う。箸は成人した彼の掌にほとんど隠れていた。長男も布製の箸入れから自分の箸を見つけ出して撫でまわしている。木箸の先端部の噛み跡や握り部分の汚れなどにも、彼なりの思い出が詰まっているのであろう。

二人とも我が家を巣立っていくまで、三〜四回の箸替えの時期があった。それ等の箸は全部が紙箱の中に並べてあった。次々に箸を取り出しては、思い出に興奮する二人を見ているうちに、私は妻と私の「替え箸」をも見出した。新婚当時のペアの漆塗りを経て、晩年の檜の箸までが並べてあった。

妻は息子の嫁たちと正月料理の買い出しに出かけている。我が家の男どもが、彼女の几帳面な気配りに感動して騒いでいることは知る由もない。

引き出しの一番奥底の方から、金銀結び切りの紐を回した分厚く古びた和紙が出てきた。中身は二本の枯れた木の枝で、太さも長さも不揃いであった。

「なんだ？これ…」

息子たちは不思議がったが、私はそれを手に取った時に息が止まりそうになった。

結婚前のことだが、私と妻の初デートは里山でのハイキングであった。お昼時になり妻は持参した手作りのお弁当を広げてくれた。ところが箸がない。彼女は思いも寄らない失態に意気消沈した。山男の私は自慢の万能ナイフで木の枝を削り箸を作った。切り取った枝は「大葉の黒文字」であった。柔らかかくなる箸は使い勝手が悪かったが、妻は「爽やかな香」を気に入り記念に欲しいと言ったのだ。

あの日から五十年近くが過ぎ、枯れ果てて脆くなった枝から香は消え去っていた。しかし妻の「思い出」と「築いてきた年月」を挟み込んでいる枝箸は、私には目が潤むほどにまぶしく輝いて見えた…。

父の箸

菅原 真知子

木枝をポキッと折る。

プンと香る懐かしい匂い。

それはふるさとの山の情景につながり、父の笑顔が重なり、あの日の箸の幻影が手の中にふわりと落ちてくる。

七、八歳の頃だったか、休日父について山に出かけた。小さな村で両親は農業をしていた。風呂や、当時まだしっかりと存在感のあったかまどに使う薪や木切れを調達するのだ。

「ほうれ、見てみ、ええ天気じゃのう」

見上げた上空には、まさに青という青を集めたような秋空がいつぱいに広がっていた。

母は弁当を持たせてくれた。

子連れのせいかわらないうちの父の表情もいつになくやわらかい。仕事半分、遊び半分の気楽さが伝わってきた。秋の陽ざしを受け、平らな場所を見つけると早々と父は「弁当にするか」と笑った。

「あ、箸がない！」

「ありやま、しょうがないのう、箸ならなんぼでもあるで」

山の中だ。たしかに周りは木、木。原料は豊富というわけだ。

父は適当な木枝を折ると、持ってきた鎌を器用に使った。ちよいちよいと節を削った先細の箸があつという間にできあがった。長い箸と短い箸、それぞれにほどよく手におさまる二膳の箸。

弁当を口に運ぶたび木の匂いが鼻をかすめた。

五十数年を経て、山に接することも新鮮な木の匂いを嗅ぐこともそうない。けれど今でも思い出せる。木の匂いとそれにつながる秋晴れのあの日、父の手から作り出された素朴な箸の感触。ふとした折に、あの時の父の年齢をとうに超えた私の手にそっと蘇る。

元気をくれた箸

感王寺 美智子

夫の弁当用の箸はピンク色の桜模様である。女の子用で大柄の夫には短すぎる。使いづらいし、会社で使うのは恥ずかしいだろうに、夫は「これがいいんだ」と変えようとはしない。その箸は、六年前、私が乳癌になった時入院中に使っていた箸だ。

抗ガン剤の副作用で食欲が全くなかった。ご飯の匂いを嗅いただけで気持ち悪かった。食べることができず、どんどん痩せて行く私を見て、夫は子供用のような桜模様の可愛い箸を買ってきた。

「食べられなくてもいい。箸を持つだけでいいんだ」

茶碗も箸も持つ力がなかったが、しぶしぶと、力無く箸を握った。

「いただきます。エアディナーだ」

私は、ばかばかしいと思いつつながら、空を掴んで口に運んだ。

繰り返し、繰り返し、食べる真似をした。

幼い頃のままごとを思い出した。

箸先を唇に何度か当てているうちに、冷たかった唇に血の気が通い、口元に力が入ってくるのが分かった。

「トマトさん、いただきますーす」
「ニンジンさん、いただきますーす」

なんだか楽しくなってきた。口までモグモグ動かし始めた。箸を握っていた右手にも力が入ってきた。

それから、私は少しずつ食べられるようになり、体力を回復していった。

箸は食べ物だけではなく、気力や体力も口に運んでくれるのだと知った。

そして、退院した後から、その箸を今度は、夫がずっと使い続けているのだ。

口に出しては言わないし、私も聞かないが、私の病が再発しないように願掛けしてくれているのだろう。

また、私も元気をくれたその箸に、毎朝、出勤する夫の健康を「よろしくね」と祈るのだ。愛情たっぷりのお弁当に添えて。

今日から

奥村 由布子

正しい箸の持ち方を知らぬまま、誤魔化して生きてきた。裕福とは縁遠い家庭で生まれ育った自分にとって、食事とは空腹を満たすものであり、箸の持ち方を教えてもらえる機会はなかった。

それでも思春期を迎え、友達と向き合って食事をとる際にはやはり恥ずかしい気持ちになった。箸の持ち方を見られぬようにわざと会話を弾ませてみたり、サンドイッチやハンバーガーなどを選んでみたりした。

心の内では、箸で優雅に食事をとれる人が羨ましくて仕方がなかった。そしていつの間にか、両親のことも、自分のことも嫌いになっていた。

そんな、ある日。私はうっかり、男友達とラーメンを食べに行ってしまった。思い返してみれば、そんなに油断してしまうほど、気の置けない相手だったのかもしれない。

「箸の持ち方、正しくないよ」

ラーメンが到着するなり、彼に指摘された。正面から誰かに指摘されたのは初めての経験だった。

一瞬の沈黙の後、私は自分の生い立ちを話した。それで嫌われてしまうなら、しょうがないと思った。

「じゃあ、今日から覚えればいいじゃん」

彼の瞳は、優しく微笑んでいた。

「ほら、ここをこうやって」

彼に触れられるのは初めてで、私はどきりとした。と同時に、頬が赤らむのを感じた。

できないことを誰かのせいにしないこと、そして未来は自分で変えられるということを、箸のおかげで彼に教えてもらった気がした。

時を経て家族となった現在、彼は子どもたちとの夕食を楽しむに、仕事場から急いで帰ってくる。

「ほら、ここをこうやって」

根気強く箸の持ち方を教える彼を、私はこっそりと見つめている。こんな穏やかな日常がずっと続きますようにと、願いながら。

憧憬

高尾 光秀

祖母には商才と慎みが備わっていた。

戦時中、物資が不足している時に知恵と行動力で財をなした。タイヤ工場から出た廢材を利用して草履を作った。今でいうサンダルである。商品をトラックに積んで売りに歩いた。荷台は直ぐ空になり、金を入れた鞆の留め金が締まらないほど膨れたという。

博多商店街の女将から預かった着物や帯を米や芋に替えた時期もあった。女将たちや農家との繋がりには、その後の商いの根幹を成した。そんな祖母が特別な思いを寄せていたものがある。箸だ。こんなことを言っていた。

「公侯伯子男の使いなさる膳のものは違う。成り上がりもんには真似のできんことやね」

どんなものかと聞き出すと、漆の中から真珠の煌めきが見えたと静かに語った。祖母の中に秘めた憧れを垣間見た気がした。

料理屋の位付けにも箸が絡んでいた。卓の中央の筒に束で納められている店は大衆食堂となった。料亭でも箸が粗末なお店は低く見ていたようだ。

ある時、家族には内緒で出入りの業者に箸入れを作らせていた。玄関に居合わせた私が届け物を受け取ったことで発覚した。私は直ぐに祖母の部屋に呼ばれた。

「あんただけは見せちゃるけん。こんことは誰にも言うたらいけんよ。知れ渡ってごらん、泥棒が次々に入ってくることになる」

目の前に置かれたのは、博多織の札入れを改良して箸が三膳納められた特注のものだった。箸はどれも似たようなものに見えた。臙脂色の漆に貝で細工が施されていた。綺麗なものだったけれど、三揃いも必要ないように思えた。もちろん、口には出さなかった。

「どれもこれも、あん時見たもんに似とるんやけど、どっかが違うんよ。まあ、見つけても使えんのやないかね。勿体無いけんね」

普段は恐い部分の多い祖母が童女に戻ったような眼差しを箸に向けていた。そんな祖母は後にも先にもなかったことだ。

残念ながら祖母がこれらの箸を使うことはなかった。最後の最後まで筆筒の引出しに仕舞ったままだった。だから、葬儀の際に箸入れのまま桶の中にこっそり入れた。形見に一膳の残すかどうかを迷ったのだけれど全部持たせることにした。向こう側で朝昼晩と使い分ける楽しみを味わえばいいと考えたからだ。

世は豊かになり物が溢れる時代になった。箸に贅沢をしても憚れないだろう。私も祖母に負けないような一膳を探すつもりでいる。

一膳の竹の箸から

築城 弘美

三十才の頃、大分に住む友人が竹の箸をくれた。先が細くしなやかで、持ちやすく美しい。気に入って愛用し、更に自分で買い足した。丁度同じ頃、私は自分の生きる術を模索して夜間の調理師学校へ通い始めていた。卒業後居酒屋で働くようになった。実務経験もないただ調理師学校を出ただけの三十すぎの女には当時、仕事はなかなか見つからず、ようやく見つけた居酒屋だった。が、厨房ではなく、接客業だった。忙しい店で、昼のランチから夜の居酒屋業まで注文をとったり運んだり片づけたりをくり返す日々だった。そして毎日出るゴミを最後にまとめる。そのゴミの大半は、お客さんが使用した割り箸であった。毎日出る大量の割り箸は一度使用する度にポイと捨てられ山になっていく。そんな光景にいつしか違和感を覚える様になっていった。

箸を捨てないで再利用する店を持ちたいと強く思う様になっていった。

四十になり、なけなしの自己資金を基に、小さな居酒屋を持った。準備の為に市場に行くとな業務用の割り箸が大袋に入って売られていた。もちろん、私は自分の店の箸は再利用できる箸と決めていたので、値段は少々高いが大分の名品竹の箸を購入し、それを使う事にした。

お客さんの反応はとても良かった。この箸が自分も欲しい。「売ってくれ。」という人が沢山いた。この箸で食を見ると、焼き魚も骨まできれいに食べられる。と感動してくれる人もいた。再利用である事を嫌がる人は、一人もいなかった。

日本人であるなら、子供の頃から必ず箸を使っているはずだ。食べる所作の美しさは、箸の使い方も含まれる。例えば、相手がおらず、一人だけの食事であっても、美しく食せる喜びは満足度を高め、幸せな気持ちになれる。酒も心地よく進むというものだ。

店は十年経った。

箸は幾度か新たに購入し、新旧入れ替わりもしたが、あいかわらず大分の竹の箸を使っている。三十の頃、友人が私にくれた同じ竹の箸を。

怒られなかった箸の練習

森山 ひかる

私の父は、生まれたときにはもういなかった。母は、女手一つで、四人の子どもを育てている。そのため、私のほとんどの時間は、保育園であったり、学童であったりした。

箸はもちろん、オムツはずしも、鉛筆の持ち方も、三輪車、自転車などなど、すべて保育園や学童の先生に教えてもらい、身につけていった。

私の記憶もだいふ薄れてきたが、箸の持ち方の指導だけは記憶に強く残っている。なかなかうまくできなかったが、一度も怒られることはなかった。いつか怒られるだろうと、上手くできない日々にびくびくしていたのに一度も怒られなかったことが、子どもながらにほっと安心したこと、今でも深く感謝している。

私の箸の持ち方は、クロス箸になってしまったところが問題だった。うまくつかめないという時期が長く続いた。

保育園の先生たちは、まずはきちんと箸を握ることを優先してくれ、毎回、初めて説明するかのようになりわかりやすく箸の持ち方を教えてくれていた。今思えば、かなり根気のいることだったと思う。イライラもしたのであろう。

あたたかい指導があり、今はきちんと箸を使えるようになった。そして箸を持つことに抵抗もなく、食事を楽しく過ごすことができている。

怒らない教育は賛否両論だ。しかし私は、自分が箸について怒られずに育てられてきた側として、それは感謝でしかない。そして、その苦労も年月が経つにつれてわかるので、私もしてもらったから、誰かにそのようにしてあげよう、という気持ちに変わっていく。

特に箸は、日本人として切っても切れない文化だ。ここに劣等感を抱いてしまったら日本人としての愛国精神もなくなってしまうだろう。

そこまで、保育園の先生たちは、もしかしたら考えてくれていたのかもしれない。

箸を習うのは、日本の文化を引き継ぐことと、あるべき教育の姿を伝えていくこと、まさに「日本人としてのバトンを渡す」作業であるのだと思う。

お箸が教えてくれたこと

下村 花連

夏休みになると、母は本州旅行に連れていってくれます。その中で一番、頭を悩ませるのは祖父母、特に祖父へのお土産でした。

「何もいらないよ」と言ってくれますが、お小づかいをくれるのでそうはいきません。

母に相談すると「自分で決めなさい」と言います。きつと、わたしの自主性を尊重してくれているのでしょう。そこで考えました。できれば、毎日使うものにしたと。頭に浮かんだのは「お箸」でした。お箸は一年三百六十五日、日に三度は使います。これほど希望にピッタリのものはないと考えました。それ以来、おじいちゃんにはデイズニールランド、広島、京都、長崎でお箸を買って来ました。

おじいちゃんは「これだけあれば死ぬまで箸には困らないな」と、食事のたびに喜んでくれています。今、おじいちゃんは広島で買ってきたお箸を使っています。それを見て時々、わたしの胸に痛みが走るがあります。

それは広島の前爆ドームを見た、戦争の被害を受けた悲惨な写真を思い出すからです。わたしにはものすごいショックでした。この時、戦争の恐ろしさを初めて知りました。なんの罪もない子どもが、戦争の一番

の被害者なのです。写真の子どもたちの目は、わたしに何かを訴えているように感じました。

さて、おじいちゃんは「今度は京都の箸にするかな」と言います。でも、おじいちゃんが広島のお箸を変えたとしても、戦争へのわたしの思いが変わることはありません。おみやげに買った一膳のお箸がそう感じさせてくれたのです。いつもなにげなく、当り前に使っていたお箸。これからは、心身を成長させるための必需品として大事に使います。

たん生日プレゼント

上之段 亜玖吏

『みほちゃん』とほってあるおはしをおみせで見つけた。お母さんのたん生日にプレゼントするぞとずっときめていた。そのおはしを買って、今ぼくのひみつのはこにかくしてある。あしたは、お母さんのたん生日だ。お母さんはどんな顔するのかな。よろこんでくれるかな。

おねえちゃんとおにいちゃんといっしょにお母さんのたん生日プレゼントを買いにおみせに入った。

「おれは、ティーシャツにする。」

「わたしは、くつしたにしよう。あぐちゃんはとうするの。」

とおねえちゃんに言われた。

「お母さんのなまえがおはしにかいていてかっこいいんだけどお金が足りないや。」

とぼくが言うと、おねえちゃんとおにいちゃんが

「まい日お手つだいするんだぞ。がんばったらごほうびにおこづかいあげる。」

と言ってくれた。まい日、せんたくものをたんだり、ごみすてしたり、たくさんお手つだいました。

たくさんお手つだいして、お父さんもおこづかいを少しくれました。

「まだ、おみせにあるかな。ドキドキするな。なくなってたらどうしよう。」
とおねえちゃんに言うとおみせにいっしょについてきてくれました。

『みほちゃん』とほってある茶色のおはし。

木のはこにカッコよく入れてくれました。家にかえり、お母さんにみつからないようにひみつのはこにかくしました。

たん生日の日、お母さんに

「おめでとう。」

とわたしと、お母さんは木のはこあけて

「うわあ。かわいい。おはしになまえがかいてあるね。うれしい。木のいいかがりがするわね。」

とおたふくのようにわらい、すぐくうれしそうでした。ぼくもとてもうれしかったよ。お母さん。

お母さんが、ぼくのあげたおはしでおいしそうに食べています。ちよっぴりおはしは、お母さんの手にぎゅとにぎってもらい、いいなあと思いました。いいなあ。いいなあ。

つながっているおはし

坊垣 妙泉

わたしはしょう学校にはいるまで、つながっているおはしをつかっていました。おねえちゃんがつかっているおはしはつながっていません。わたしはなんでわたしのおはしだけつながっているのかわかりませんでした。

パパやママはおみせやさんでごはんをたべるときにいつもつながっているおはしをよいしてくれました。おみせやさんにつながっているおはしがなかったからです。

いまわたしはつながっていないおはしをつかっています。いままではみんなとちがうおはしで一人だけなかまはずれでわたしはいやでいやでたまりませんでした。でもみんなとおなじはとてもうれしかったです。

でもいまはまだじょうずにもてません。ママにまいにちかられてばかりです。たまになくこともありました。じょうずじゃないと子どもにもおしえられないし子どももおとなになるから子どもにもおしえないといけないおしえてないと子どもがおしえようとしてもへたつぴだからおしえてもきたないもちかたしかできない。おはしのもちかたはみんながおぼえないといけないだいじなことだとおもいます。

大切なもちかた

坊垣 心都

「もちかた。はし。」

今日も妹がおはしのもちかたでママに大きな声でおこられています。

わたしはもちかたってそんなに大事なのいつも思います。もちかたがわるくてもじょうずにごはんを食べられる人はいますし、フォークやスプーンがあればなんでも食べられます。

わたしはずっとそう思っていました。
パパがわたしに、

「おはしのもちかたは小さいときにパパやママとどれだけいっしょにいたか、どれだけいっしょに話したかよく分かる。その人がどんな人かよくわかる。」

とせつめいしてくれました。

わたしはせつめいされてからまじめにおはしをもつようにきをつけています。おはしにきをつけて食べていると、なぜかせなかがのびます。お豆もじょうずにもてます。

ママがパパであった日、ママはパパのはしのもちかたをみてけっこんしようとおもったそうです。はしのもちかたをちゃんとしていればパパみたいな人にあえるかもしれませぬ。

ある箸職人さんとの出会い

玉井 貴夫

八年ほど前、地元の百貨店で開催された匠の技を紹介するのれん市で、七十代とお見受けする職人さんが箸を売っていた。その職人さんが、水とこんにやくが入った汁椀を差し出し、この箸でこんにやくを持ち上げてみてくださいとおっしゃる。私はきつと滑り落ちるだろうと思いつつ、こんにやくの角をつまんだ。はたして、こんにやくは落ちることなく見事に箸につかまり、難なく持ち上がったのである。箸先に滑り止めのギザギザでも付いているのだろうと目を凝らすと、そのような物は見当たらない。見た目は「単なる竹の箸」である。そこで私は、「どんな秘密があるのですか？」と軽い気持ちで尋ねた。すると職人さんは涼しい顔で「これが箸だから。」とだけ答えたのだ。

私はその一言に強い衝撃を覚えた。箸に秘密があるのではなく、そもそも私のほうが本当の箸を知らない、というわけだ。箸という、日常使う小さな道具を、生涯かけて作り続けてきたであろう職人さんの答えに、私は己の未熟さを感じた。そして、自分の仕事に自信を持って誇り高く売っている姿に感動し、ここのお箸を購入した。というより、分けていただいたと思っている。

職人さんの名前は知らない。お店の名前も思い出せない。お箸にブランド名が刻まれているわけでもない。

しかしこのお箸は「単なる竹でできたモノ」ではなく、職人魂のこもった、私の生活に欠かせない道具である。独身時代に買って単身赴任先にも持って行った。君より長く付き合っている相棒なんだと語ると妻は笑う。

私は、三十代半ばを過ぎた今、器や靴など、日常の道具を作る方々に出会う旅に楽しみを覚えている。あの職人さんと出会ってから、品物を手に入れるときには、作り手や売り手の技や思いをできるだけ知りたい、そして道具と謙虚につきあい、心豊かな生活を送りたいと考えるようになった。

今朝もこのお箸を使って食事をした。ふとしたとき、「これが箸だから。」とだけ語ってくれた職人さんの涼しい顔を思い出す。

無名兵士の箸

武富 慈海

戦争資料館を開館して三十七年になる。日中戦争・太平洋戦争に従軍歴九年の亡父が戦争の反省と戦争を知らない次世代に戦争の真実を伝えることを目的として、一九七九年七月に自宅を改造して『兵士・庶民の戦争資料館』を開館。日本で初めての私設資料館である。年中無休、入館無料、「手に触れて下さい」の方針を父は開館当初から亡くなる日まで貫いた。

十四年前に父は急逝。母が二代目館長として今日まで資料館を維持・運営している。私は副館長として九十歳の母を支えている。

資料館は常設展示の実物資料が二百点ある。ガラスケースの片隅に木製の箸一膳と箸箱が展示されている。その横に『空しかれどスプーンを作り箸を削り思い満たせど飢えは満たせず』と書かれた短歌が添えられている。私は父が存命中にこの箸と箸箱そして短歌の由来を聞いていた。

太平洋戦争のニューギニア戦線に従軍した兵士が現地で手作りした遺品で、その出来栄えからおそらく軍隊に入営前の職業は指物師であろうと父は話していた。制空権、制海権を連合軍に握られ補給ルートが断れたニューギニアには食べ物が多くなかった。「いつも箸の立つご飯を食いたい」が兵士たちの願いであった。生

きるか死ぬかの極限状況の中で、現地の木で箸と箸箱を幾日もかけて作った兵士の思いを慮ると胸が痛くなる。

土に伏し草に仰向き、背負子に引き倒されて死せる如きあり、或いは椰子喰はんとしてコプラの腐えたるを握りしまま、或いは水飲まんとして水辺にねじれて倒る。悉くこれ傷ましくも尊き餓死の姿なり。(工藤政男ニューギニア戦詩の一節)

ガダルカナル、ニューギニア、レイテいずれの戦場も餓死による兵士の遺体が累々と散乱し数知れぬ蛆の餌食となり、白骨をさらす身になり果てた。非情で悲惨な戦争の実相であった。白骨となった遺骨は異郷の地で今なお百万柱ちかくが眠ったままである。

近現代史専攻の学者の研究によれば、日本軍将兵の戦死者・戦病死者数二四〇万三千人のうち七〇パーセントが餓死であった。

極限状況の戦場においても箸食の作法を忘れず、飢えと戦って死んだ兵士がいたことは日本人として誇りであり、来館者にいつまでも語り伝えていこうと思っている。

母の手元の思いで

高田 勝

三十年以上前になるが、長女が四歳の頃、夕飯を囲みながら彼女の手元を見ると、箸の持ち方が変であった。なんと、私の持ち方と同じなのだ。中指と薬指それぞれの指先の腹に箸を置き、中指側を動かしてつかんでいる。

当時、テレビドラマの中で、女優さんが変な持ち方をしているのを見たので、娘の手元が気になってしまったのだ。自分のことは棚に上げておいて、何とも失礼な話だが。

食事のとき、妻は娘の横に座って世話を焼いている。娘の目には、向かい側に座って食べている私の手元がよく見えたのだろう。私のほうは、そんなに真剣に見られていたとは、露ほども感じなかったが、子供の観察力はすごいものだ。

そこで、「さっちゃん、箸の持ち方がお父さんと同じだけど、これ、お父さんの間違いなんだ。競争して直そうか」と言うと、「いいよ」と言うことで、二人の競争が始まった。

それからわずか二週間程で彼女は完璧に直し、私は三ヶ月以上かかって、ようやく直すことができた。その間、「お父さん、まだできないの」と言う娘の得意そうな言い方を今でもよく覚えている。

それからしばらくして、実家で父母らと食事をしていたとき、啞然としてしまった。ふと母の手元を見ると、まさに私が持っていた箸の持ち方なのだ。娘の持ち方を見るまで気にも留めなかったが、私のそれは母の持ち方だった。

当時母は、もう六十歳を過ぎていたので、今更直す気もないだろうし、豆や豆腐といったものもつかめるのだから、支障も無いだろう。あえて私から言うこともしなかった。

今、九十四歳になる母は、相変わらずあのもち方だが、器用に好きな煮豆をつかんで食べている。

娘の子供たち、つまり私の孫たちだが、二人の女の子は、とても綺麗な箸の持ち方をしている。

最近では、エジソンの箸というものがあって、二〜三歳からこれを使って、正しい箸の持ち方を習得したのだそうだ。便利な世の中だが、少なくとも、親の手元を見て箸の持ち方を覚えるという人間の能力は、退化してしまっただろう。

悪癖は、付けないほうが良いが、直すのなら、エジソンよりも親子の競争のほうが好きだと思うのは、時代遅れだろうか。

母の持ち方を見て私が覚え、それを娘が見て覚えたあの箸の持ち方は、正しい形ではなかったが、家族の繋がりを感ぜさせる出来事であった。

八角箸

本間 由美

主人はとても不器用だ。靴の紐を結ぶのも、シャツのボタンを留めるのも時間がかかる。まあ、それは個人的な事なので我慢もできるが、食事中に料理をぼろぼろと落とすのには参ってしまう。ましてや醤油をつけた刺身などを白い服に落とした時などはひと騒動だ。醤油の染みが残っては大変なので、すぐに服を脱がせて洗剤などで洗わなければいけない。落ちていて食事もできないのである。まったくのところ、子供より手間のかかる主人であった。

そんな主人が、ある旅館に宿泊した際「この箸使いやすいな。料理がぴたっと吸い付くようにつかめると言ったのだ。」

(どうしてだろう)

私は自分が手にした箸を見てみた。それは八角形をした箸だった。旅館の仲居さんにその箸のことを尋ねてみると、その形の通り「八角箸」という種類の箸だと教えてくれた。それから、この箸はどんなものでも簡単につかめるということも付け加えて教えてくれた。

試しに豆やこんにやくなどをつかんでみると、お茶の子さいさいという感じで簡単につかめた。不器用な

主人でさえ、得意げに豆をつかんでいた。

(これは買うしかない！)

自宅に戻った私は、早速インターネットで八角箸のことを調べてみた。正直なところ、安くはなかった。とはいっても値段はびんきりで、三千円くらいのものから三万円くらいのものまであった。

(一番安いのでいいか)

そうも思ったが、少しばかり奮発することにして八千円ほどの八角箸を購入した。

さて、現物が届けられ。主人に使わせてみると――。何とも見事に料理をつかんでいくではないか。本当に優れたものだった。これで私もゆつくりと食事ができるようになったのだから、八千円の箸も安い買い物であった。

そんな主人が最近、八角箸をもう一膳欲しいと言ってきたのだ。「どうして？」と尋ねると、「外用で使いたい」との返事が返ってきた。確かにワイシャツやネクタイには頻繁に食べ物の染みがついている。クリーニング代を考えると安い買い物かもしれない。だけど八角箸は高価な品だ。しばし考えてから「誕生日プレゼントで買ってあげる」と言い伝えた。主人は少し不満気な顔だったが、私は内心で満面の笑みを浮かべていた。

何と言っても、クリーニング代が減り、誕生日プレゼントに何を買うのか悩まずに済んだのだから……。まったくもって一石二鳥であった。

美しい箸使いは父の思い出

太田 美樹子

五十六年前、私が小学六年の時に、四十九才で亡くなった父は、私が箸で食事をしはじめると、「ミキコ、箸はな、こうやって使うんだよ」と、箸の持ち方を、やさしくていいねいに、ゆっくりと、時間をかけて、食事の度に教えてくれました。

なかなか上手に使えない私を、一度もしかる事なく、ちょっとしたでも上手に使えると、「そうそう上手に上手に」と、まるで天下を取ったようにほめてくれました。

父のこの言葉は、幼かったけど今でも覚えています。「ミキコ、女の子はな、箸をきれいに使うだけで美人なんだよ」と言ってもらった事も。

そして、私には三人の姉がいて、私がそれなりに箸を使えるようになった時、改めて姉達の箸の使い方を意識して見た時、父が教えてくれた通りに、きれいに使っている事がわかり、そうか、姉達も、私と同じように、父に教えてもらったのだと悟ったものです。

そんな私を見て三人の姉達が、口を揃えて「そうよ、ほら、きれいでしょ」と、箸をひとさし指と、まん中指ではさんで、美しく動かすのを見て、感動したものです。

そして月日が流れ、私は三人の娘の母になり、三人の娘達に、父と同じように箸の使い方を、そして思い入れを伝授しました。

そして、その三人の娘達が成人し、それぞれの職場や嫁ぎ先で、箸の使い方が美しいね」と言われ、とてもうれしかったと聞いた時、父の事を思いました。

父はきつと、天国で喜んでくれているだろうな・・・と。

親から子へ、子から孫へ、美しい箸さばきを、日本の美を伝えていく事の素晴らしさを感じたものです。

私と箸

山口 尚人

今から四十五年前の高校一年の時だった。男子クラスメートが二時限目の授業が終わった時私に話しかけ「お前の弁当売ってくれんね。三百円でよかね。」と言うと私に三百円を渡した。

当時、私の高校には学食があり、三百円でカレーを食べることができた。私は『今日はカレーでいいか。』と内心つぶやきクラスメートに弁当を渡した。するとクラスメートは手に取るやいなや、弁当を空け食べ始めたのだ。いわゆる早弁である。休み時間の間にクラスメートは弁当を食べつくすと、

「お前のお母さんの玉子焼きの味は絶品やね。」
と言って箸を箸入れに無雑作に入れた。弁当箱には米つぶが残っていた。

実を言うと私の弁当は人気がありよく売れるのだった。クラスメートのうわさでは玉子焼きが特に旨いの評判で、あるときは三百円から五百円に値が上がる時もあった。皆からそう言われるのは嬉しかったが、箸を作られるのは嫌だった。

ある日母に言った。

「お母さんの玉子焼きはクラスで評判が良く、俺の弁当が食べたいとよう言われるとよ。」
と母を喜ばせるつもりで言ったのだが母は、

「何であんたの弁当の味を他の生徒が知つとると。」

と少し怒りを込めたニュアンスで言った。

「たまたま売ったりしたことがあるけん。」

「どうりでたまたまごはん粒がいつぱいと思つた。箸も貸しとるとね。あの箸はあんたの為だけに使うよ買ったとよ。口に入れるものを人に貸すなんて。汚かやる。もう作つてやらん。」

と怒られてしまった。心の中で『一応箸は貸したくなかつたんだ』と呟いたが母には言えなかつた。

弁当の中身もだが箸にも親の愛情があつたのかと今でも反省している私である。

私と箸

畑島 杏果利

「これが自分用の箸……」

私は高校に入学する前、受験高のホームページやパンフレットに『箸の持ち方』などと書いてあったので、驚きました。

早速豆を買い、箸の練習を始めました。食べる時も気を使いました。そして、試験日が来ました。私は、手が疲れるほど練習し、その結果合格しました。久田学園の入学式の時、校長先生が「入学のお祝いに、箸のプレゼントをします。」と言われ、びっくりしました。

箸を手渡された時、何故か箸が光っている様に見えました。私は嬉しさと驚きのあまり、最初に書いた一言が口から思わず出しました。

私は「よしっ。これから、一生使い続ける。」と心に誓いました。

私は、箸をいただいた瞬間に運命を感じた事を今でも覚えています。そして、箸を使う度に思います。

「死ぬほど練習して良かった。」と。

箸を上手に持つと、食事や食べる姿もきれいに見えます。だから、ずっとずっと『箸美人』を続けたいと

思います。

「箸」は喋りませんが、色々と私に学ばせたり教えてくれたりします。だから、私はいただいた自分の箸といつも向き合い、たとえ箸がボロボロになったとしても、一生懸命使った証だと思い、この箸を大事にしていきたいです。

あの頃、みんなが伝えたこと

奥岡 伸子

私は、左利きである。今では何という事もないけれど、かつて子どもの左利きは、「矯正」されることが多かった。私が幼稚園へ上がる頃、「左利きを無理に直す子どもがいじける」と教育者が言い始めた。伸び伸び育てば御の字と娘に伸子と名をつけた母は、慌てて私の左利きを直さないことに決めた。

けれど私は今、右手で箸を使っている。文字を書く時は左手でペンを持つが、食事では右手に箸を持つ。左手で箸を持っていた頃を憶えているから、最初から右利きだった訳ではない。誰が、私の箸使いを変えたのか？ それは、「食卓を一緒に囲んだあの頃のみんな」だ。

私の実家は商売しており、両親と叔父夫婦の他に七、八人が働いていた。当時の商家は「まかない付き」が普通で、昼ともなれば子どもを含め、一四、五人の食事になった。一度に全員は卓につけず交代で食事をする、人がワイワイとひしめく食卓で、私は箸づかいをおぼえた。

「おいおい、肘がぶつかるなあ」

並んで食べる食卓で、左に座った若衆（わかいしゅ）がわざと肘をぶつけて来る。私はゲラゲラ笑いながら、そつと箸を持ち変えた。左利きが悪い訳じゃない、みんなと気持ち良く食べたかったのだ。盛り鉢から

直箸で取らないこと、箸で器を引き寄せないこと、食事のたびに周りの誰かが小さな決まりを覚えてくれた。箸づかいや食事の作法は、同じ卓を囲む大人から子どもへ、口伝で伝わる教養だった。

そして今、私の息子も左利きで、彼は左手に箸を持つ。不作法ではないだろうから、彼の左利きは直さない。だけど私は息子から見れば、食事の作法にうるさい母親だと思っ。

「将来誰と食事をするか知れない、行儀が悪いと恥をかくよ」

誰彼となく言われた言葉。子どもの頃は反抗心半分で聞き流していたけれど、行儀が悪いことを恥とする心持ちは美しい、と今は思う。我が家は核家族だから、行儀が悪くても誰も見ない食卓だ。だからこそ、あの頃のみんなを背負って、箸の上げ下ろしだけはうるさく言ってやろうと思っ。

箸と共に旅立った両親

小林 千榮子

あれっ、この箸——夕食後に食器洗いをしていた私の手が一瞬止った。今までと見た目は変わらない父の箸が、ものすごく軽い。

「パパの箸、変えたの」

「そう、同じ様なもの作ってもらったのよ」

母はさりげなく言った。

確かにその日、父の食べ方は何時もよりスムーズだった。

父が六十六歳の時、筋力が衰える難病（筋萎縮性側索硬化症ⅡALS）であることを母と私は医者から告知された。

それから一年、筋力の衰えは進んでいった。

父はそれまで使っていたどっしり重みのある、母とお揃いの桑の箸がお気に入りだった。

父は箸が軽くなったことに気付いていたのかもしれないが、その時の筋力では軽さは有難かったに違いない。

けれど、この軽い箸が使えたのもそれから三ヶ月くらい。指を動かすのが難しくなり、プラスチックのスプーンになった。

母は暫くの間、箸とスプーンの両方を食卓に並べた。父は箸を持ってみるもの、すぐ置いてしまい、スプーンを使った。

明治生まれ、カレーライスも箸で食べていた父が箸を使えない。さぞ無念だったと思う。

プラスチックのスプーンさえも両手で持つようになっていた六十八歳の八月末、呼吸筋の衰えが予想外に速く、自力呼吸が出来なくなった。

人工呼吸器を着けて二週間。夜に付き添っていた私と朝に交替する母を待っていたかのように、父の心電図の波が平らになった。

「あちらでは、これを使って下さいね」

母はお棺の中に桑の箸を入れた。

それから十年後、母は脳梗塞で重度の左麻痺後遺症が残った。右手も今まで通りとはいかないので、父が使った軽い箸で食事した。

何度も入退院を繰り返しているうちに、母も箸を使うことが難しくなったが、食卓には箸とスプーンの両方を並べた。

最後の三年間は私が食べさせることになった。軟らかい物は挟みづらかったけれど、なるべく箸を使って

母の口元に運んだ。

平成十七年一月、十六年間、不自由な体で生きた母の最期は、本当に眠るようだった。

「あちらで仲良く食べてね」

母のお棺の中に、父と揃いの桑の箸を入れた。両親が使った軽い箸は私の手元に残した。

今年九月、父の三十七回忌を終えた。

第一回エッセイ賞 優秀賞

えんむすび

高橋 有希子

「三年目の浮気ぐらい大目にみろよ」なんて、二十代の私だつて歌えるわよ！そんな嘘みたいな出来事が、自分の身に降りかかるなんて思いもよらなかった。

同じ職場で出会った彼には魅力的なところが沢山あった。男女ともに友達が多くて、楽しいことが大好き。左利きであることも、他人とは違う彼の魅力の一つだったのだと思う。結婚してからも共働きで、仕事の忙しさと子供がいなくてもあり、家でご飯を食べるといふ発想はまるでなかった。若かったからかもしれないし、妻としての自覚が足りなかったといえはそうかもしれない。違和感に気がついたのは結婚三年目の春。それから私の長い長い冬が始まった。

新しい出会いがあれば少しは吹っ切れるかなという企みが無かったわけではないけれど、最悪の日々で傷ついた自分を癒すには、神頼みしか残されていなかった。夫との縁を結び直すか、自らの手でほどくのか、覚悟を決めるチャンスだった。大きなしめ縄の前でたった一人。どっちにも決めることもできなくて、情けなくて泣いた。

帰り道、境内のお札授与所で「えんむすびはし」と書かれた夫婦箸に出会った。神頼みだった。このあか

らさまな「えんむすび」は、今の私たちの微妙な関係を見つめ直す小さなきっかけになったのかもしれない。何も言わずにお箸を変えた。ごちそうさまの後、彼は「いつもありがとう」と言った。なんか久しぶりに笑った気がする。どうして家には、家族一緒の食事の時間が無いのだろう。私には、まだ、彼を許すことができないでいる。

私の右側に座る彼のお箸が、私の右手とぶつかった。ただそれだけでいい。今のこの時間が止まってしまえばいいのに。なかなか出番のない、かわいそうな「えんむすびはし」。大きい箸と、小さい箸。まるで私達のような。今はまだ、檜の香りがきつくて、綺麗で、とんがっているけれど、だんだんと色もくすんで、先っぽもまるくなつて、きつといつか私たちの形になつていくのだろう。人一倍、長い時間がかかることを覚悟しなきゃいけない。

「惚れたお前の負けだよ」。そんな夫の声が聞こえてくる。

えんむすびはしに願いを込めて。いつまでも、あなたと一緒にご飯が食べられますように。笑っていられますように。

第一回エッセイ賞 優秀賞

箸を使える誇り

阿部 松代

何の気なしに使っていた箸に、日本人としての誇りを感じたのは社会人になつてからだ。

大学卒業後、香港で就職し、ほどなくして中国人の李さんと仲良くなつた。中華料理店でいっしょに食事をしていたある日、箸の話題になつたことがある。きつかけは近くのテーブルで欧米人がフォークで料理を食べていたのを見て、李さんが「中華は箸で食べてほしい」と指摘したことだつた。箸でつまんで口に運ぶからその美味しさがあるのに、と。同じ箸の文化を持つ同志のような気持ちで私も頷き、話は自国の箸文化に及んだ。

「中国は肉食文化の国だから箸の先はまるく、長いのは大皿料理を皆で取り合うから」と語る李さんの表情はどこか自慢げで、私は日本人としてのプライドに火がついたのを憶えている。「日本の箸の先が尖っているのは魚を食べる文化があるから」と説明した。さまざまな種類や美しい柄があり、使い方には多くのマナーがあると話したところ、マナーの意味を詳しく聞かれてドギマギした。なんとか答えをごまかしつつ「海外では私は日本人の代表。自国についてきちんと語れなければいけない」と反省したのを憶えている。

香港から帰国して二十年が経つた。その間、一度も会えずにいたが先日、日本で再会することができ、日

本料理店で旧交を温めた。別れ際、お土産を渡すと彼女も私のためにお土産を持ってきてくれていた。

私が贈ったのは日本の箸。和食好きな李さんなら喜んでくれるだろうと、日本らしいデザインのものにした。「あとでゆっくり開けてね」と交換し合い、再会を誓った。

帰宅し、李さんからのお土産を開けてびっくりした。箸だったのだ。七色に輝く貝殻がところどころに埋め込まれた中国の美しい箸。昔の、あの中華料理店での会話が思い出された。彼女は中国にも美しい箸があるんだよと言いたかったのかもしれない。

日本料理店での光景が浮かんだ。李さんが焼魚を上手に食べるので「器用に美味しそうに食べるね」と褒めたところ、「やっぱり日本食には日本の箸だね」と言い、「ついつい箸が進んで太っちゃう」と笑っていた。その幸せそうな笑顔を思い出してハッとした。

「食は心身を作るもの。その橋渡しをする箸は単なる道具を越えた存在ではないか」

箸を大切にすることとは、日本人としての自分を大切にすることなのだろう。

箸を持つ文化に誇りを感じる。

第一回エッセイ賞 審査員特別賞 (一般の部)

箸で世界は仲良くなれる

浅井 宏純

火葬炉からでてきた父は白い骨層になり、流星号の鉄のゼンマイは焼ただれていた。

母が父の骨を「箸」で拾った。次にぼくが同じ箸を使って骨を拾った。どの部分の骨を拾ったのか、どのような箸を使ったのか、まったく記憶にない。しかし、食べる道具、料理の道具としての「箸」で骨を拾った。その不思議が脳裏に焼き付いた。

「おまえの大事な物も入れてあげなさい」棺桶を霊柩車に乗せる直前に祖母から促され、父が買ってくれたスーパージェット流星号のプラモデルを棺に入れた。「胃カメラを飲むくらいなら殺してくれ」と叫び、癌に苦しみぬいた父との最後の別れだった。(当時の胃カメラが子供の拳大くらいだったそうだ。後に母から聞いた)

東京オリンピックの年、ぼくは小学生だった。仏壇にお供えするごはんを箸を立てた。まねをして自分のごはんを箸を立て、母に厳しくしかられた。箸は「あの世とこの世の掛け橋」という意味があると祖母はいった。いまだに本当の理由を知らないが、自分の子供たちにも同じように教育した。

現在、ぼくは、アメリカで寿司(和食)レストランの経営に関わっている。フランスが自国のワインを通

してフランス文化を世界に広めたように、ぼくたちは江戸前寿司を通して日本文化を世界に紹介し交流を深めようとしている。昨年、和食がユネスコ世界無形文化遺産にようやく登録された。繊細で大胆な和食の進化には「箸」が大きく貢献したといっても過言でない。

箸文化は中国、台湾、韓国、シンガポール、ベトナムなどアジア各地にもある。しかし、ぼくの独断と偏見と知識不足を恐れずに言おうと、日本の箸が一番すごいのだ。日本で「箸」はただの道具にあらず！「箸は神聖な道具」なのだ。神がやどる箸だからこそ、素晴らしい食文化を作り上げることができたと確信している。供養、正月の祝箸、手を使わず魚を調理し神前に供える真魚箸神事などでも分かる。調べればもっと事例がもつとあると思う。

最後に、ぼくは箸を使う外国の人々に近親感が湧く。アジアの人々でだけではない。カレーライスを箸で食べるアメリカ人、両手で同時に箸を使うフランス人、箸でまぐろの寿司を口に入れることができて笑顔満面のウクライナ人、地面に描いた魚を箸でつかもうとしたモーリタニアの小学生たち。彼らは、箸に興味をもってくれた人たちだ。箸で世界が仲良くなる。

未来は箸をどのように使うのだろうか？ 楽しみだ。

第一回エッセイ賞 審査員特別賞 (中・高校生の部)

私と箸

末永 寿穂

「箸」は日本人のパートナーだと思う。日本の食卓には必ずあり、「和食」という日本料理には、欠かせない物である。幼い時に、私は母から箸の持ち方を教わった。高校生になった時、私が通う学校では「箸美人」に成る為、入学式と同時に校長先生から新入生一人一人に箸が贈られる。幼い時、なぜ箸をきちんと持たなければいけないのか疑問を持っていったけれど、「箸美人」を目指す今、正しい箸使いをすると人の見る印象も変わり、自分に自信がつくのだと分かった。だから、自分に自信が持てず、人との会話も積極的になできなかった私であるが、高校で正しい「箸美人」になり、自信をつけたいと思う。

入試で箸の持ち方のテストがある時も、母がアドバイスしてくれた。先生にも持ち方がきれいだと言われ、とても嬉しかった。箸の持ち方を教えてくれた母に感謝したい。また、正しく箸を持つことの素晴らしさを教えてくれた学校にも感謝したいと思う。

文化の架けはし（箸）

大城蓮

昨年十二月に「和食」がユネスコ文化遺産に登録され、はしが注目されるようになりました。

はしは、他の食器と比べてとても変わっています。スプーンやフォーク、ナイフなどは金属でつくられています。はしは主に木でつくられています。

さらに形もスプーンは丸く、フォークは先端が三つまたになっていて、ナイフはぎざぎざした形になっています。しかし、はしは単純な二本の棒です。

ぼくは、はしがとても和食に適していると思いました。

なぜなら、米つぶをはしでつまんだり、ぼくの大好きなきんぴらごぼうもスプーンやフォーク、ナイフでは食べにくいと思いますが、はしなら簡単に食べられます。

はしは、地味な形をしています。実は大きな役割をしています。このはしという文化がもっともっと世界に広まれという願いをこめて、今日もはしでごはんを食べています。